

雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

猪

小林 貴子

赤とんぼ鳥見^{とみの}霊^{れい}時^じへ行き見たし
盆過のいつか空掃く木々となり
樹木にも昂りありぬ八月は
縷紅草母の厳しき言葉思ふ
螺子を巻きすぎて鯛ぶつと切れ
鬼灯や身をからつぽに旅に発つ
猪のぬた場見てより気の逸^{はろ}り
告白のとき氷鳴るレモネード
中庭はどこへも行けず秋の風
京を去る心に月の昇り来る



真弓の実

佐藤 映二

青北風や北上川の白楊^ドたくましき
鉄漿^お蜻蛉^{ぐろ}に呼ばれて舟の人となる
野分晴賢治を慕ふ虫ぞろぞろ
水澄んで雲のおおかみ北を指す
独房の窓ごとちがふ天の川
真弓の実熟れて月光いろにかな

四季と折り合っ

佐藤 映二

去る九月二五日、東京有楽町の朝日ホールで、雑誌「兜太『Tota』創刊記念の催し（主催・藤原書店）があった。「わたしの兜太」と題して宮坂主宰を含め七人がそれぞれ故人との関わりに触れながら、前人未踏とも称すべき兜太の巨きな足跡を踏まえた悼辞を述べた。ここでは、それに先立ち上映された映画「天地悠々 兜太・俳句の一本道」（予告編）の監督河邑厚徳氏の話の一端を紹介したい。

氏は、NHK制作局の一員として「シルクロード」シリーズほかの映像を担当したほか、グライ・ラマやM.エンデらを取材した経験

から、兜太のユニークな人となりに関心を抱き、その表情・声・衣と食のありようなどからその人の全体像を描くことを心がけてきたという。二〇一三年から折にふれて記録を撮りつづけ、本年二月九日という生死を分けるぎりぎりの時期に、子息の真土さんに許されて熊谷の自宅で収録する機会も。「兜太という人は世界中でも他の人に代えられない、本当にかげがえのない日本人だ」との一言は、公開されたごく一部の映像からも、決して過言ではないと感じられた。

兜太が九九歳を迎えるはずだった九月二三日を完成目標としたという、全篇七四分のドキュメンタリー映画公開が待ち遠しい。